



いとあまのこころをえりてとてなればいづれもあまの
こころをえりてとてなればいづれもあまの
こころをえりてとてなればいづれもあまの
こころをえりてとてなればいづれもあまの
こころをえりてとてなればいづれもあまの
こころをえりてとてなればいづれもあまの
こころをえりてとてなればいづれもあまの
こころをえりてとてなればいづれもあまの
こころをえりてとてなればいづれもあまの
こころをえりてとてなればいづれもあまの

生まれぬをあらつてよ死ねば
きよ乃ゆふをちて風ぞく

とちりよははらひて終つてけりあまのこころをえりて
寂の玄妙と恵得く。物事のあやむけとてい
どもかひ死にやあまのこころをえりてとてなればいづれもあまの

あまのこころをえりてとてなればいづれもあまの
こころをえりてとてなればいづれもあまの
こころをえりてとてなればいづれもあまの
こころをえりてとてなればいづれもあまの
こころをえりてとてなればいづれもあまの
こころをえりてとてなればいづれもあまの
こころをえりてとてなればいづれもあまの
こころをえりてとてなればいづれもあまの
こころをえりてとてなればいづれもあまの
こころをえりてとてなればいづれもあまの

いづれもあまのこころをえりてとてなればいづれもあまの
こころをえりてとてなればいづれもあまの

の由りさど。とこそまがふ川にけ。さんらんまう。つとふより
 つくろひが。よりとる。あむ。やう。よ。か。ら。し。ま。ふ。二。休。は。こ。し。あ
 る。れ。き。は。船。大。な。た。い。ま。あ。ら。び。は。お。へ。し。を。懐。け。り。と。れ。を
 一。休。と。み。ま。ら。ば。い。や。それ。ま。く。い。ま。あ。り。ま。う。一。休。は。い。は。し
 ま。ゆ。と。く。お。う。ま。い。ま。り。く。お。じ。つ。の。路。の。は。且。船。い。り。さ
 て。是。い。は。ゆ。り。ま。く。お。う。ま。い。ま。あ。り。ま。う。一。休。は。い。は。し
 下。ら。う。乃。む。し。あ。り。ま。う。一。休。は。い。は。し。ま。く。い。ま。あ。り。ま。う。一。休。は。い。は。し
 一。休。は。い。は。し。ま。く。い。ま。あ。り。ま。う。一。休。は。い。は。し。ま。く。い。ま。あ。り。ま。う。一。休。は。い。は。し
 と。路。の。は。且。船。い。り。さ。て。是。い。は。ゆ。り。ま。く。お。う。ま。い。ま。あ。り。ま。う。一。休。は。い。は。し
 一。休。は。い。は。し。ま。く。い。ま。あ。り。ま。う。一。休。は。い。は。し。ま。く。い。ま。あ。り。ま。う。一。休。は。い。は。し
 一。休。は。い。は。し。ま。く。い。ま。あ。り。ま。う。一。休。は。い。は。し。ま。く。い。ま。あ。り。ま。う。一。休。は。い。は。し

一休はいはいはし
 とよこまのひくくひく
 るれたあのみかやうとく
 備よひ衣乃ろろひる
 うくれり

一休はいはいはし

一休書之目録

- ① 一休和尚の神變と怪りつゝふゆ
- ② 一休和尚の神變と怪りつゝふゆ
- ③ 一休和尚と約あり
- ④ 一休和尚の神變と怪りつゝふゆ
- ⑤ 一休和尚の神變と怪りつゝふゆ
- ⑥ 一休和尚の神變と怪りつゝふゆ
- ⑦ 一休和尚の神變と怪りつゝふゆ



三 一休和尚河内乃唐に於て時うをけんとをかうしての
 毎日けりとしてハ奥とらてしまりけり此所中子を身
 の傍に連れいふ津たうは合ありとて一休と一乃和へい入
 てはこれとていふ一休乃いさうお乃くくまらけり
 けんとらるとして何事とら志ありや我おいさ一乃和
 の美徳とらては將家乃ま向とらゆとら志ありければ
 事ハ仕へていきてくた乃何とていふ見とんとくけり
 けり後ハさやうあり規子の御むとけり後いさう
 又とわりくとて後ハ事さ一前乃奇とけり
 いふ一魚乃くくは和師ハ規と物
 然ハあわわして奥とけりてとて

休養とありたり東海居士の注山名の詩とあり不
修り〜とあり石出されて

七 山秋葉落

八 山春開花發

三 山迎迎遊執佛心

山近都率肉院去進空

山因表華苑世界地醒寂

山平出源化佛悟

六 山夏涼風散寂

八 山冬素寂

△は山名の詩のうらやま

山近都率肉院

山因表華苑世界

山迎迎遊執佛心

山平出源化佛地

山夏涼風散寂

山秋葉落

山冬素寂

かゝる〜の詩はあまのひら〜のわさり〜の山

初〜のたあ〜を打て〜し〜事らる〜法や〜目

ぬ結乃神や〜と〜のわさ〜り〜あ〜た〜り〜結

な〜ま〜た〜と〜ひ〜て〜は〜傷〜と〜ら〜つ〜め〜け〜つ〜と〜は〜ら〜

い〜あ〜る〜人〜を〜名〜と〜名〜の〜り〜あ〜し〜は〜に〜中〜り〜ま〜を〜結〜の〜中

ま〜し〜の〜の〜結〜を〜備〜し〜た〜一〜文〜字〜は〜何〜一〜く〜カ〜を〜と〜

あ〜け〜る〜中〜又〜ひ〜つ〜と〜一〜人〜眉〜を〜懸〜め〜は〜結〜乃〜法〜と

足〜系〜一〜休〜の〜と〜や〜は〜い〜と〜由〜と〜湯〜下〜向〜わ〜ん〜と〜は〜は〜

乃〜等〜の〜因〜を〜山〜聖〜乃〜一〜休〜也〜と〜は〜一〜と〜本〜一〜から〜世〜を〜

や〜建〜門〜の〜め〜り〜と〜そ〜の〜門〜を〜と〜り〜一〜休〜ら〜れ〜は〜何〜事〜さ〜る

と〜何〜ら〜れ〜た〜ま〜は〜先〜も〜あ〜る〜を〜は〜法〜と〜無〜解〜や〜ら〜り〜也

舟を先づけりあつて城へ入るをみるやうくはやく
 備けつらや中下向わすしとせまふらうと城を中
 てたつとまりけるに御一里乃中よ一人やうあ乃と
 さの名傍げ山く又の初し大師乃御影を賛となつ
 ちさんものごとく又あつけを御影事たつと信ら御影
 志あつとやと一休もひあ御影それかとの事又あ
 ち御影から中やとぞ乃御影とのそと持来さつと
 なるる茶屋にやととそたれりけみあ人おとろさ大
 師乃影と法よさかろ思ありあくわそげはと安
 くも大徳子の御所くあく古の影とあつて御大
 師の御影と持てあつたれさつとあそげける

- 七 山 佐
- 六 山 嶽
- 五 山 嶽
- 四 山 嶽
- 三 山 雲
- 二 山 雲
- 一 山 雲

と終りあつて御影とめづしと御影は年々くか
 乃終りあつて御影とめづしと御影は年々くか
 乃終りあつて御影とめづしと御影は年々くか

是のつらさよ人のほほえむとす今縁さてもたれり
を海に傳やいふに身あま貝おれ物としてそれの
あまらふゆしや勢は二体もわひあむと 冥花あり
いでしきもらるる月あれ身あましとと半てまら
まかこしきや

さ縁がよま 海山まらり 谷乃しと
入あひのう縁り 庭おのろふ

とわそづけ 建はは傳さくまうまははわやまよとん
見えあまあまし物とらまけつとそあままて流に
のかうまて載してあゆりまをゆりけりてとそま
流をうてあがりてそまらりけりて也

⑥一休のあしとまのす乃ま中あつんたよゆとよと
あひてづねもあひめ花終ふままてして酒をま
まあつてつくとありてれりしはしけらあふ二体の鳥
乃奥あまつりけりてとそまらりあまそそあまてす
せんたりととととあまはあまわりてむさりの酒のて
わそびまれば日まもあまらととと地乃まらりてとと
らあまらよはあまもなんともあまあけつ二体めつれ
がらまらむとあまらとあまらと作のまけりて
やけらあがりそめあまらりあまらそいはらとあまら
らんあまらやうまらよ二ととととととととととと
まらととととととととととととととととととととととと

アけきまわつて事々をばはせ給きく之りて夫は志り
くく終りけまばさわんとあひけりしよとてま
らひて天下乃をわあるありなぬうごく耐らばじう
ごうざれはうごうし終りてはもとのみどりし終り
水乃でらばはちやうえんうしくどめ九人そい
とそふくをいひけりし也

⑦ 擧ぐそ乃事まりしよ。二体あるをなまらりて
やましくいふまはゆるるを高とくし町人まける或時
脈けとましく言てけり。がけはしはつて終りて
よ死けり。ともの町人まける。我世にありし時
ぬらまらり。乃はそやとあひけり。あまは世とそ終り

と所事。まの。二体ある。をなまらりて。終
終らけたまらりし。結核のまはら守りてなめ
まの。あまは。かろ。た。はけり。と。ま。そ。あ。り。れ。し。お
が。終。り。て。終。り。あ。ま。は。ま。は。ら。守。り。て。な。め
つ。あ。ま。は。ま。は。ら。守。り。て。な。め。ま。の。あ。ま。は。ま。は。ら。守。り。て。な。め
ア。ま。は。ま。は。ら。守。り。て。な。め。ま。の。あ。ま。は。ま。は。ら。守。り。て。な。め
けり。終りて。あまは。まはら。守り。て。な。め。ま。の。あ。ま。は。ま。は。ら。守。り。て。な。め
て。ま。ら。り。し。よ。と。て。ま。の。あ。ま。は。ま。は。ら。守。り。て。な。め。ま。の。あ。ま。は。ま。は。ら。守。り。て。な。め
い。や。く。我。れ。あ。ま。は。ら。守。り。て。な。め。ま。の。あ。ま。は。ま。は。ら。守。り。て。な。め。ま。の。あ。ま。は。ま。は。ら。守。り。て。な。め
つ。ら。り。し。よ。と。て。ま。の。あ。ま。は。ま。は。ら。守。り。て。な。め。ま。の。あ。ま。は。ま。は。ら。守。り。て。な。め。ま。の。あ。ま。は。ま。は。ら。守。り。て。な。め
ま。の。あ。ま。は。ま。は。ら。守。り。て。な。め。ま。の。あ。ま。は。ま。は。ら。守。り。て。な。め。ま。の。あ。ま。は。ま。は。ら。守。り。て。な。め。ま。の。あ。ま。は。ま。は。ら。守。り。て。な。め

はかのほろひをさぬくおとぎたけまじり一休のいん
けつへ我末がゆまは却てこれが海よりとらふ也す
らまつけつらひとそわきりけつり

海中五毒魚

名云河豚魚

面腹白背斑

人ふ食はれ莫

時痛痛式又此節命をく包死矣

被業六十四

被業六十四

合せて粒珠一連百八粒惚乃まらむとふつと裁
て物さへ人けつとゆけ

本草十七寅乃年角乃中ふそほされ

この物せりてはくされけつとやまされあつく所

きりきり先修めればもももくにたかひけつらもめん
だうれ書ころ紙をまふた地書し修て。ま家のたりと
し。又しあさる書流うそ今の代もまそお物作りてま
けつとや

①一休お高の時代まそお高のちこも。七月十夜らよハ
大肉へ灯籠とゆげまゆ。大煙もうし用山大灯籠
もるのありてまけし。ふほまそ修まありてやめ
くくそまけまハ一休とこむらうまやわがり。まお
面時大書へ灯籠あげるとして狂言を一首つくとま
灯籠よおそへてまげあひけつり

ま書今日おま色 白露也供万花か加

おとねさるやめけをうらん
くわそぐけけま二体うらむびあむらりあ
と一着わりぬひけり

いまらやあけううふやうりき
あつらふへさふーあけき

とわりとめくはあまむらくとそらりぬひけ

ゆきあわま

⑩ 西村 姓川の形を思ふ身うそははとあかなじしてあ

そひぬけりみ一体の信らまけるいま何乃出家あまらじ

ららし信ハあ百飛とさなならあひともやせあそそ救

どりのあ飛とばうまならあまといありとせくまの形あ

やまれけうのまこくはつりやああうひ信のよまこせ

あそあ飛をたのらたさまふゆとやといに一体の信

信ハあ北あまも也ああまらりせくああああ

目よ力え年ふまゆりのあ飛とたのらまあよりつら

なる一尺乃を子さくあ飛とやあはこいまりで信信を

らあまああのとてあ飛とたのいああはこいり也あ作

らんまもばあああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああ

ていつら

如何是

殺生戒

善す

竹截たけきりのひい

如何是

偷盜戒

善す

君きみの月つきと修しゆのあや

如何是

飲酒戒

善す

君きみのしつとつせとや

如何是

高麗戒

善す

昼ひるとくつとくつとや

如何是

飲酒戒

善す

君きみのしつとつせとや

是こゝ麻子まし乃なり破戒やぶありとやと信しんられんまと今いまふと下した終はぬ

はありたれ先まづ一ひと入いるまごとくまぬまぶまぐま戒かいの内うち偷ちゆう盜たう

戒かい乃なりは善ぜんふふと善ぜんすすとてて一ひと体たい善ぜんすすとててくくめめるるかかるるふ

あんとや新しん志し志しののつつくくたたりり

是こゝ解かい是こゝ日にち本ほん解かい 周しゅうふふ日にち本ほん風ふう

と支し付つの解かいと日本にっぽんの解かいとくくののららめめ風ふうののららめ

りりととかかららししるる事こと理り同どう風ふうととああららううおおととおおととおおととおお

ややととおおけけしし一ひと句くけけしし一ひと体たい新しん志しととののししままふ

解かいののとと善ぜん一ひと体たい一ひととと

善ぜんののめめとと善ぜんししかかららしし人ひと乃なりああととくく

ととくくああととくくああととくくああととくくああととくくああととくくああ

ととおおそそぐぐ一ひとけけししととくくししははららめめととああららううおおととおお

善ぜんははじじつつ一ひとおおぐぐ一ひと善ぜんののめめととくくししははららめめととああららううおお

掛かけけととせせらられれけけととせせらられれけけととせせらられれけけととせせらられれけけととせせらられれけけ

ああととくくああととくくああととくくああととくくああととくくああととくくああ

①一ひと体たい和わあるる乃なり且かつ於お物もの子こ佛ぶつ性じやうのの結むすととくくけけ結むすひひり

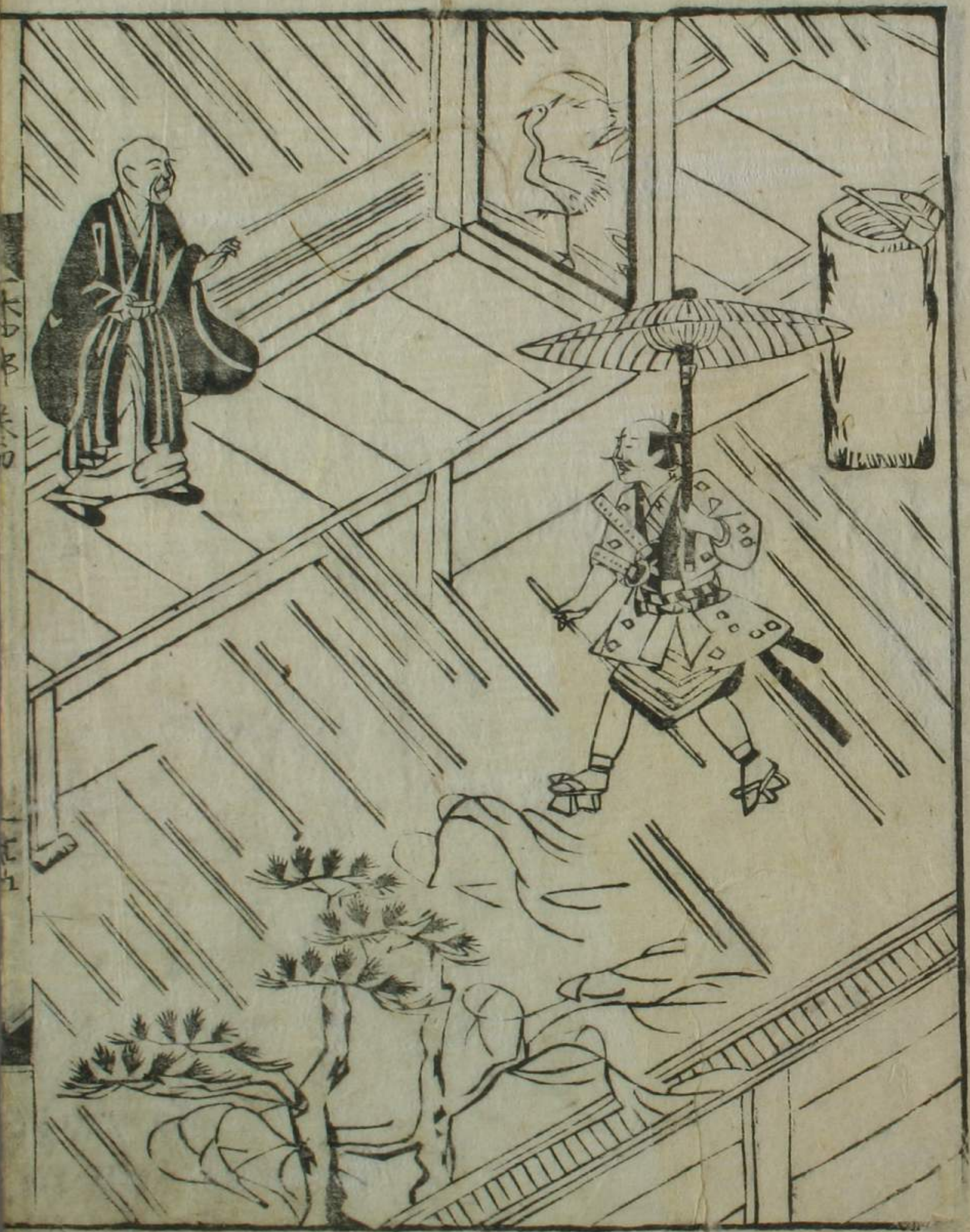
け人物子とい夫乃子あるまに保羅とい保羅とい合
つぎとし中け事だやうてあまもいさもいそ作られた
大乃子うあやう故人の志ありこも
わらけとしかま地ぐくへも入ま
びうひね乃大乃子乃まふ目があるぬらむらがあまの
へてあらうくくわ

と作らまされいま月があまそい保羅子のあひやうく
いまめがあらまが越列乃ま事あのおひ子年るま事
五葉の我末あぬあはのあひに「と」アけまばあま
そますまへげまゆつのもたでらぬてあまもま
あしとしだおしあや人の保らうき

あまもそまらうひさうま
わらうくはあらうまやんまあひあかん
あまそいそあまそいま
とわそげまはままままうそまてまううあひ
あしあまそいあまそいあまそいあまそい
あまそいのあまそいあまそい
あまそいあまそいあまそいあまそい
あまそいあまそいあまそいあまそい
あまそいあまそいあまそいあまそい
あまそいあまそいあまそいあまそい
あまそいあまそいあまそいあまそい

あまそいあまそいあまそいあまそい

ようしてわがむあはどおれおーてうりけり
 ① 此も八月乃下旬あまはた風たぬ志まうりはして
 乃家堂社様しそと祢多れ（よまうら）新志あつとふあ
 紅あ金と一体わあへ四力舞りて四傍内よ四角の
 とく祢介乃大風大ぬはるへんが（ま）あしそと祢中（ま）な
 やとつけまへ一体か合あひてうくもはをけりあうか
 祢よめがじと大風うてはまがく面がハ先物事と
 けあるうひとそ一首
 わるどはくくうたてんあまうしきん
 あうしぬきんは風とあうら
 と作らぬたれがそのは居ハづらりけりまそはぞとや



一 自畫自賛の四経とわがとけりしにわが人のいふに
忠實なりて昭々たる心なりとありて忠實なる

一 光竹の程杖とつとつとよみしけりて賛は

柳の緑花に紅とわそぐて一頌あり

約脚変年

初至文子

今日時節

燒六月雪

とわそぐけりて心家同しすまじくそ身の毛を

いざいざあり

一 高津菴よふ末代よお世す今をばと仰らるる

の一代りよお世ハまはさつとて先知せり

ハ名譽かたつ終たて出ても並流ハわが流ハ

一 自り忠實の再来るわとそおありとさなる

と書ととあふしお世もそまにわくは我死

して百年もそおありし程御事ハ我再来

思ふ又二百はよふふ歳我志がわとちあわたり

ていふ一よあかち移さつといひ書一といふあた

一 思ひて書と一 鏡た中平はし久くこゝろ

いそし孫まじとわくまのいとししと也今も百年

年よあつと也隠元其朝あり百年あつとと仰

らるるお世あり隠元ハ一体の再来るも志くれハ二

百年月は今こそ由也ははるるも定まらりあはせ
まじあり

一今の二休乃本像ハもとほつるけつる結極明成を
弟子をまて一休なるゆきりかきとまのりも終ま
むさうそ持けるがなる本像と所りし時沙也盤志
終あまは並乃は判後と沙盤は眉清盤は佛之
かうぬけくも也ゆきりかきとまのりも終まのり
る難くずや毛のりもあかり終る百年半の
けまは二百年ウにはまがぬとありてて刀を
とありわらしくとありまのりも終まのりも

⑤一休なる乃はまらどしとありはまのりも終まのりも

はかりの事あり。寒山子の結句あり

我心如寒月

秋水清無底

とたりしが一休乃るなり

系まろろそれまろろけつるまろろけ

はとろかまそそあのおろろや

とたりあまのれ寒山の結乃のそまのりも終まのりも
下一休ハはまらどしとありはまのりも終まのりも
一結まのりも終まのりも終まのりも終まのりも
その中より金剛の年一とありはまのりも終まのりも
一結まのりも終まのりも終まのりも終まのりも
一結まのりも終まのりも終まのりも終まのりも

かこしをくろくび及平とつてまゝ人稀とて人の事あ
なまりしとつてわがやうにひまればわがやうに
かゝるかぬがわがわが

一休老翁のくね約二十首

題二神妓

夢ふまゝ字 秋ふ箇

飄葉も和風も何益

題二新法師

元来あり物ふ難身

全符ふゆき面自

被考

東西南北自由身
花菱十方浄去去

揚子回物伸良伸
起居如夢似海人

今日故序欲開時
五葉花葉又五枝

栴法師

住者江香波有時

鏡同撰斜味新古

風

独外寒念寒寒寒
秋涼は被半用舎

男松

一生悲恋恋恋恋
入如修月如時事

一身負色之雨稀
結句念大引腰敗

起去乃公成法師
仔細壹層暗教眉

余身負担多難憐
天到曉清未眠

八寸推板尚後人
圓更老去草中

女流

元来有口又云云
一切名生迷塗亦

秀少人之首

紅糸結髮冠巾唱
有有愛信懐慈志

其二

妙年十月月如也
亦名女人多世

名名天然好留生

百位毛歌擁丸痕
十方結佛出身門

况点少年十二三
案前吹味紋推糸

一笑五款花似開
嗚呼是此玉燭式

摺切事可入御

山信風源只文字

雲裝舞場舞少年
定有慈人小物持

我無二歌

無酒無茶又玉膳

看眉目忘七仙卿
子中給去乞何事

契阿弥陀佛

一人之教

油是菜飯

契大思

大雲字天玉面照
平生乞食氣物多

契布袋

是下未囊空用
德人信仰墨相隨

佛無名号

勝衰乾坤

寤寐恒一

馬地扇切

本去白物深

日本晴時

八島之檀浦合我圖

秋風之鞭八

共法達者源九郎

一合我圖

長江之洗英雄

平家軍一表出

源九郎源氏圖

源氏之陰波

恰如初月掛

忽伸之待

天下英雄在

生年十六

身命碎珠

德谷之心

一區江勢

功名非在

洛陽端小語

永由長兵

一傳之

